

火野葦平選集

第五卷



火野葦平選集第五卷

東京創元社版

火野葦平選集第五卷

昭和三十三年二月二十五日初版

定價五〇〇圓

著者

ひのあしへい
火野葦平

發行者

小林茂

印刷者

田中末吉

東京都新宿區新小川町一ノ一六

東京創元社發行

電話(33)八五一二(代表)

振替東京一五六五

印刷・理想社 製本・鈴木

第五卷目次

花
と
龍

序
章

三

第
一
部

三六

第
二
部

四九

結
章

四七

解
説

四七

花
と
龍

父の靈にささぐ

序 章

女の出發

「たいそう暗いが、キヌさん、もう何時ごろかかう？」

「まあだ、三時にはなりやあすまいね」

「やれやれ、この谷は一日がよその半分しかないよ。仕事も半分しか、でけやせん」

「その代り、夜がよその倍あるわ」

「倍あつたつて、電燈はつきやせんし、油は高いし、寢

るしか用がない。この村の者がどんどん都に出て行くわけがわかるよ。遠いところに行く者は、ハワイやブラジルまでも行つとる。成功しとる者もたくさんある。その成功した者は、もう二度とこんな草深い田舎には、かえつて來やせん。かえらんのがほんとよな」

「マンさん、あんたもどうやら、出心がついたようにあるねえ。兄さんの林助さんは、關門の方に行つてなさるといふことだが、元氣にして居りんさるかね」

「はい、門司で、沖の仕事をして、儲けだしとるとかで、わたしに、出て來んか、つて、なんべんも手紙をくれなさる」

「だけど、たいがいなら、港なんどというところには出んがええよ。人氣が荒うて、若い娘はモミクチャにされるといふけえ。……マンさん、もう、煙草葉のばすこと、やめんさい。歸ろうや」

「お父つあんが、楽しみに待つてなさるけえ」

「親孝行もんよ。おふくろも安心でがんひよう。でも、その煙草葉、大丈夫なのけえ？」

「大丈夫とも」

深い谷の底である。四方の山がきりたつていたので、この部落には、朝の光線がさすのはおそく、日の暮れるのは早い。まして、日の短い秋であるから、まだ三時というのに、もう黄昏のようだ。部落の名は、廣島縣比婆

郡峯田村字峯。

はげしいせせらぎの音をたてる谷川の岸で、二人の若い村の娘が話をしている。健康そうなのは共通しているが、マンの方は丸顔の小柄、キヌの方は長顔で、おそろしく背が高い。

粗末な木綿着のマンは、川岸にある二段歩ほどの煙草畠にしやがみ、しきりに落ちた古葉をさがして重ねる。ていねいに、皺をのばす。なれた手つきである。

野良着で、手に鎌を持つているキヌの方はススキの林のなかに、おおむけにひつくりかえて、

「やあれ、もう、狐さんたちが鳴き騒いどらあ」

と、のんきたらしく獨りごとをいいながら、無意味に、パスツ、パスツと、ススキをたたき切っている。

深い山には、狐、狸、兎、猿、などがたくさん居り、ときどき、猪があらわれることがあつた。昔から現在にかけて、狐に化かされた話は数えきれない。谷川には河童がいるという。河童と角力をとつたという老人が、自分の實見談を、爐邊で、まじめな顔して話す。

マンは、煙草好きの父のために、一枚でも餘計に葉をひろうつもりである。においの強い、黄色い枯葉が、箆のなかにたまる。

すると、寢ころがつていたキヌが、突然、くると起きあがつた。なにかを見つけたらしい。

「マンさん、大事、鬼が来たよ。早よ、隠れんさい」
切迫した語調で、叫んだ。

おどろいたマンも、狼狽したが、おそかつた。

「こらあ、逃げるのならんぞう」

と、太い聲が、山の道からひびいて來た。

鬨音堂のある山道の曲り角にあらわれた一人の大男が、大股でバネ仕掛のようにとびながら、かけ降つて來た。

黒い中折帽をかぶり、黒い詰襟服で、これも黒の皮カバンを右手にぶらさげている。顔いろも、日やけと酒やけで赤黒く、ちよび髭が木炭をくつつけたようだ。

「とうとう、見つけられたなあ。ええかげんで、早よ、やめんもんじやけえ」

キヌは、もう、青くなっている。

「かまうもんか」

観念したとみえて、マンは、煙草畠のなかに立ちあがつて、男の近づいて來るのを待った。煙草の葉を入れた箆だけは、畠のくぼみに隠した。

「逃げるんでないぞう。逃げたつてわかるぞう」

男は、まだ、そんなことを叫びながら、谷川の岸に來ると、朽ちかけた丸木橋を、あふなつかしい足どりで渡つた。二人のところをやつて來た。

「こんなことだろうと思うた。お前、谷口の娘ッ子だな？」

「はい」

「盗んだ葉を出しなさい」

「盗みはしません」

「ちやんと見とつたんだ。その箒を出しなさい」

マンはあきらめて、黙つて、くぼみから箒をとりだした。

「ほうら、こんなに盗んだぞ」

「盗んだんじやありません。落ちていたのを拾うたです」

「こんなに葉が落ちるわけがあるか。どうもこの邊の奴は、ちが悪い。政府を馬鹿にしとる。今度は許さん。處罰してやる。……おい、そつちの娘ッ子、お前もいつしよにやつたのとちがうか」

「とんでもない。わたしは草刈りに行つた歸りに、通りかつただけです」

「怪しいな。ま、ええわ。共謀としてひつくくるところだが、特別にこらえてやる。歸れ」

キヌは、籠を背に負うと、一散に走り去つた。

「谷口の、わしについて來なさい。お前のお父^とうに逢うて、ようと調べたうえで、罰金申しつけてやる」

「お役人さん、そればかりは堪忍して……」

「ならん」

「ほんとに、盗んだとじやないけえ」

「やかまし、行け」

男にはげしく肩をつかれて、マンはしかたなく先に立つた。

黒服の男は專賣局の役人である。煙草が專賣制になると、嚴重な規則ができた。この部落でも作つてゐる家が多いが、段に何本と定められ、それは專賣局の原簿に記帳される。種は專賣局からもらひ、葉の數は精密に調査されて、一枚も私することはできない。ただ、葉の上、中、下とそれぞれ味がちがい、役にたたぬ部分もあり、その落ちた何枚かを自家用に吸うことだけが、大目に見られていた。

山峽の底は日没が早く、二人が歩いてゆくうちに暗くなる。點々とある家に、ランプがともる。ツクツク法師と狐とが鳴いている。

淵になつた谷川の横に、水車小屋があつた。水車がゆるく廻つてゐる。そこまで來ると、役人は立ちどまつた。あたりを見まわしながら、

「ちよつとお待ち」

「なんぞ……？」

「話したいことがある。その水車小屋に入んなさい」

マンは、ちらと水車小屋に視線を投げたが、その切れのながい、大きな眼に、不安のいろが浮かんだ。

「話なら、ここで聞きます」

「ちよつと、お前の持つとる煙草葉の數を讀みたいんだが、外では風で飛ぶ。たいそう風が出て來た。小屋の中なら飛ぶ心配はない。さあ、入んなさい」

そういうと、役人はがたびしと水車小屋の一枚戸をひきあけて、さつさと、先に入つた。中から、マンをうながした。

マンも、しかたなく、おずおずと、小屋に入つた。

暗い。鎧窓からさすかな光線で、三坪ほどの小屋の一隅に、土間に半分埋められた木臼が、三つならんでいるのがわかる。その中に、粃あはが入れられ、水車の廻轉によつて動く三つの杵きねが、それをおそい速度で、ドッス、ドッスと搗うている。たえ聞なく、水の音がしている。小屋の中は、へんにかびくさい。

「煙草の葉を見せてごらん」

役人は、やさしい聲でいつた。態度がまるで變つてゐる。帽子から、服、カバン、靴、顔にいたるまで黒い大男が、急に、猫なで聲を出すので、マンは一層氣味がわるくなつた。無言で、箆へらをさしだした。

役人は、葉を一枚々とりだして、手でもんだり、においをかいでみたりしながら、

「ずいぶん念入りに取つたものだなあ。お前は、わるい女のようにではないが、どうして、政府の物を盗むようなことをするかね？」

「お父つあんが、煙草が、しんから好きなもんですけえ……」

「なんぼ親孝行でも、法は法、可哀それでも、罰金をかけにやあなるまいなあ」

「お役人さん、もうしませんけ、どうぞ、堪忍して……」

「さあねえ」

思わせぶりに、役人は、じろりと、マンを見た。この、「鬼」という綽名をつけられている專賣局の駐在員は、さつきから、マンの後から歩いてゆくうちに、下等な慾情をそられた模様である。こりこりとひきしまつた若い女の身體つき、腰や尻の彈力に富んだ動き、藥草履をはいた白い素足、はつれ毛のたれかかつてゐる小麥色の首すじ——この、眼前にある新鮮な熟れた果實を、とつて食べたくなつたものにちがいない。

「谷口の、罰金はいやかね？」

と、舌なめずりする口調で、マンの方に寄つて來た。

三角眼が淫よらに光つてゐる。

「はい、いやです」

「とりやめにしてあげようかね？」

「お願いします」

「じやが、タダというわけにはいかんなあ。あんたもこれだけのことをしといて、タダですむとは、まさか思つて居らんだらう？」

「どうしたら、よろしゆう、がんひようか？」

「そうじやなあ、一番簡単なことですとすするかね。」

……な、それで、よかろ？」

マンも、男の考えていることが、やつとわかつた。飛びすざつた。

「それは、いやです」

「いや？へえエ、ええことしたうえに、罪を帳消しにしてもらうのがいや？もう、處女でもあるまいに。みんな、そうするんじやがなあ。それが、利口だよ」

そういううちにも、黒い大男の身體が、小柄なマンを、風呂敷につつむように、からんで來た。マンははげしく抵抗したが、強い男の腕力に抱きすくめられた。まつたく身うごきができなくなつた。

ドロクくさい男の息が、顔に近づいて來た。マンは土間におおむけに轉がされ、恐しい力でおさえつけられた。

前に、一度、マンはこれと同じ目にあつたことがある。この夏の盆踊りの晩であつた。草深い山峽の部落では、盂蘭盆會は、若い男女が思いきり羽をのぼす唯一の祭である。盆踊りは、柿ノ坂という、養蠶のさかんなことで有名な部落の仲藏寺で行われる。谷口家先祖代々の墓も、この寺にあつた。

父善助は、子供たちをこの寺につれて來て、祖先の墓

の前に立たせ、昔ばなしをするのが好きだつた。もう時代のほどわからぬ古びた墓石は、原形をとどめぬほど、方々がかけている。文字もよく讀めない。しかし、善助は、

「ほうれ、この紋を見れ」

といつて、墓石の上部を、節くれだつた指で示してみせる。

「なんにも、ありやせん」

子供たちがそういうと、善助は得意になつて、語りだす。

「お前たちにはわからんでも、お父つあんには、ありありとみえる。これはな、平家さんの御紋じや。源平合戦で敗れた平家さんの落武者は、源氏の追討が、エツときびしいもんじやけえ、日本國中の山奥に逃げこんだんじやが、このあたりにも來なさつたんじや。今はこれだけでも開けたが、わしの小さいころは、この谷は晝間でもお化けの出るようなところでな、平家さんの殘黨が永いこと隠れて住んどつた。國勢調査のとき、はじめてそれがわかつてな、なんでも、まだ、チョン髷結うた、奇妙なサムライが山奥に居るちゆうんで、官員さんが調べに行つたらな、刀さしたのが出て來て——もう、源氏は亡びたか、と、きいたというわい。谷口家も、平家さんの一門じや。根ッからの土ン百姓とはちがうぞう」

マンは、先祖が平家であらうがなからうが、格別、なんとも思わなかつた。父の自慢するのがおかしかつた。どうかすると、そのことに父の衰えを感じて悲しかつた。ところが、このことは村では由緒めかして取り沙汰され、村長の家から、二男というのに、ぜひマンをくれと縁談の申しこみがあつた。二男坊は大學を出たということだつたが、マンは、高慢ちきで、鼻眼鏡をかけたこの男を好かなかつた。いく度、強硬に督促されても、拒絶した。すると、盆踊りの夜、この男から、寺の裏の杉林にひきこまれ、おさえつけられたのである。青白い顔なのに、恐しい力だつた。すんでのところに、提灯をつけて、誰かが通りかかり、あやうく難をのがれることができた。

家に歸つて、このことを父に報告すると、善助は、「馬鹿なやつが。そんなことはこれからもある。よう覚えとけ」と、女の護身法を教えてくれた。

專賣局の「鬼」に組みしかれたマンの頭に、ぱつと、そのときの父の言葉が浮かんた。マンは、もう夢中だつた。しかし、聲は立てなかつた。齒を食いしばり、眼だけを怒りに燃やした。男の股間にさしこまれたマンの右手に、あるかぎりの力がこめられた。異様な叫び聲を發した男の顔色が、スウッと大根葉色に變つた。はげしい疼痛をおこすと、「鬼」はぐつたりとなつて、そこへ倒

れた。

マンは、はね起きた。飛びすぎた。顔が熱く火照り、動悸がはげしく打つ。肩で大きく息をしながら、見ると暗い土間に、松の太木をころがしたように、男は横たわっている。動かない。

そつと、近よつた。眼がひきつり、亂杭齒をむきだしにして、唇の部厚な口が、ポカッと開いている。狸のようである。マンは、耳を男の胸にくつつけてみた。それから、そこらに散亂している煙草の葉をかきあつめ、策に入れた。それを持つて、水車小屋を出た。

井戸の底から見あげるような空に、うす赤い夕燒雲がただよい、一羽の鳶が悠々と舞っている。あたりに、家もなく、人影もない。キョーン、と一聲、遠くに、狐の聲が聞えた。

マンは、水車のところに来た。箆を置き、水車をまわしている瀬の岸にしやがんだ。落ちて来る谷川の流れて、手を洗つた。それから、水を兩手ですくい、ごくごくと飲んだ。咽喉がひどくかわいていた。澄んだ冷たい水が、食道から胃袋へ通つてゆくのがわかり、

「ああ、おいしい」

と、思わず、聲が出た。

かすかな黄昏の光のなかで、マンは、すぐ眼のまえの流れに一匹の鮠のいるのを認めた。水はかなりはげしく

流れているのに、小さな魚は流れにさからつて、間斷なく鱗をうごかしながら、ほとんど停止している。すこしずつ、進む。それを見ると、マンはしんとした氣持になり、すこし落ちついた。

マンは、もう一度、兩手で水をすくい、それを口一杯にふくんで、立ちあがつた。小走りに、また、小屋の中に入つた。

倒れている役人のところに行き、顔を目がけて、プウッ、プウッと、二度に、水をふきかけた。すると、男の顔がびくついて、開いていた口がふさがり、ウウン……と、くぐもつた呻き聲が、咽喉の奥底から起つた。役人が動きたず氣配を知つて、マンは表に飛びだした。水車のところに置いた箆をとると、一散に、走つた。

恐しいのか、悲しいのか、腹だたしいのか、それともうれしいのか、わからず、彼女は、ただ、早く家に歸りたかつた。谷川に沿つた小徑を、わき目もふらず急いだ。稔つた稻穂のうえを、しだいに強くなつた風がわたつて行くと、湖のようである。また、キョーンと、するどい狐の一聲が、今度はすぐ耳の間近でひびいた。

いくつも坂を越えた。やつと、前方にわが家が見えて來た。ランプの下で、ワラジを編んでいる母の靜かな姿が眼に入つて、マンは、突然、ぐつと胸がこみあげてきた。大聲をあけて泣きだしたい衝動を、やつと、唇をか

んでこらえた。涙があふれ出て來て、前方のランプの光がゆらゆらと流れた。

このとき、背後で、馬の蹄の音がした。

「マン坊」

と、聲をかけられた。

ふりかえると、馬に乗つた一人の筒袖姿の青年が、ススキの深い曲り道から、姿をあらわした。

「時やんけえ、びつくりしたあ」

「びつくりするこたあ、なあじやろ。狐じやあるまあし。……ほれ、郵便じやよ」

「どこからな？」

「門司の林助兄さんからと、……こつちの方は、專賣局じや」

「專賣局？」

マンは、どきつとした。

大川時次郎は郵便配達夫である。柿ノ坂の郵便局まで來る郵便物を、彼は馬に乗つて、部落々々に配達して廻る。ときには、書留や小包などの大切な物も扱うので、信用の置ける者にしか委せられない。時次郎は、その點では村中での模範青年といつてよかつた。さらに、雨、風、雪、嵐のときにも、配達を休むわけにはいかないの、身體の頑健な者でないとならない。その點でも、草角力の横綱である時次郎は、最適任者であつた。

「おやあ」と、馬上から、時次郎は、マンの顔をのぞきこむようにして、「マン坊、泣いたのところがうか」

「うんにや、泣きはせん」

「それでも、一杯、涙がたまつとる。マン坊の泣き蟲は珍しゆうはなあが、また、村長の二男坊から、いじめられたとみえるなあ」

「誰が、あんな、鼻眼鏡……」

「マン坊の方はそんな氣でも、まあだ、敬^{けい}やんはあんなのこと、あきらめんというぞ。根が狡^{かぎや}ン坊のうえに、大學出の智慧者じやけえ、惚^{おろ}れたがメツチャラで、なにを企らむか知れん。氣をつけんさいや」

「なんでやつて來ても、負けやせんよ」

「そんなら、ええが……」

ひろい縁の麥藁帽の下から、きりッとした面長の顔が、なにかの思いをこめて、マンを見る。すこし鈍くはあるが、眼には意志的な光があり、黒く太い眉がたくましい。

マンは、時次郎の瞳にただよつてゐる、その思いというのが、なにか、よく知つてゐる。そして、マンの方も、時次郎にたいして、或る氣持を抱いてゐた。

「マン坊、今夜、開^{ひら}けえ？」

「ううん、今夜は、ちよつとばかし、用がある」

用はなかつたけれども、水車小屋での事件が、どんな

結果を生むか、閑であるとはとてもいえなかつた。それどころか、マンは、今にも息をふきかえした「鬼」が、跡を追つて來るにちがいないと、びくびくしているのである。

「そうか、閑なら、今夜遊びに行つて、ゆるゆる話したいことがあつたんじやがなあ。……明日^{あした}の晩は？」

「それも、わからんわ」

「たいそう忙しいんじやなあ。いつか、おれのために、閑をつくつてくれんさいや」

「そのうちにね」

時次郎は、つれないマンの態度に、あきらかに、失望のいろをあらわしたが、それでも、にこにこ顔をつくつて、

「そんなら、また」

と、愛馬の頭^{こぶし}をめぐらした。上^{うへ}背^せのある、たくましい栗毛の四歳馬である。

「時やん」

と、マンは、急に、すこし狼狽^{うろたへ}した顔で、呼びとめた。

「あん？」

「あんた、七瀬^{ななせ}の水車のところを通つて、歸りんさるかね？」

「そうよ。あの道しかないけえ。それが、どうかしたな？」

「どうも、しやせん」

マンは、くるりと廻ると、飛びあがるようにして、家の方に走った。

家の下の崖まで来て、足音を殺した。斜になつた石段を、そつと登つた。母にさとられぬよう、裏手の牛小屋の方に廻つた。

すると、どこにいたのか、愛犬のシュンが、暗闇のなかから飛びだして來た。はげしく尾をふり、クウン、クウンと鼻を鳴らして、まつわりつく。

「シィッ、シッ」

びつくりして、追つたけれども、シュンは逃げない。晝間からずつと、一番可愛がつてくれる主を見なかつたので、よつぽどうれしかつたらしい。煙草葉を入れた箆を落しそうになるほど、騒々しく飛びかかつて、じやれる。

その氣配に、

「おマンけえ？」

ランプの下から、母イワが、ワラジ編む手を休めて、表の暗がりをすかして見た。

「はい」

と、しかたなく、答えた。

「お父つあんには、逢わなんだけえ？」

「いんね」

「山に居つたんじやあ、なあのけえ？」

「煙草草に行つとりました」

「やんれ、やんれ、お父つあんは、炭焼小屋じやろうというて、山の方に、お前を迎えに行きんさつたんじやが。今日は、朝つばらから、たいそう、狐どんが鳴きよるけえ、おマンが化かされたらいけん、というて……」

「すみません」

マンは、牛小屋に行つた。犬も、ついて來た。牛は、もう、マンの足音を知つて、小屋の板壁を角でつき、足踏みをはじめた。去年生まれた小牛と二匹、親子ともよく彼女になつている。ブルルと鼻を鳴らす。歓迎の啼き聲を出す。

牛小屋に入ると、マンは、棚のうえのランプに、火を點じた。飼料桶に、藁を入れてやつた。牛は親子で、早速、それを食べはじめた。

マンは、牛小屋の戸をしめ、ふところから、二通の封書をとらだした。耳をすまし、誰も來る氣配のないのをたしかめてから、兄林助の手紙から先に、封を切つた。小學校三年を途中でやめた兄の手紙は、片假名で、ところどころに入つている漢字は、全部、嘘字である。しかし、意味はわかる。

「——關門海峡ニハ、タクサンノ外國船ガ入ッテクルコトトナッテ、沖ノ仕事モ増スパカリトナッテ、組デハ、

若クテヨイ働キ手ヲサガシテオル。オ前ガ出テクルノヲ待ツ。ソナ山オクデ、一生ヲ終ルナンテ、馬鹿クサイト思ワンカ。思イキッテ、出テ來ンサイ」

それから、いつでも、自分の親方の濱尾組で、部屋仲仕として引きとること、住居、賃銀、門司の港と町の賑わい、都會の面白さ、などが、たどたどしい、しかし、心をとぎめかさずには居られないような書きかたで、こまごまと、記されてあつた。

マンは、二通目の封書を開いた。專賣局のも片假名文であつたが、嘘字はなく、これはいかめしく印刷してあつた。

「冠省、先般ヨリ申請中ノ願書、詮衡ノ結果、今回、谷口マン儀、煙草女工資格者ト決定セルニ付、採用ノ旨、通告ス」

マンは、二つの手紙を、何度も讀みくらべながら、いくらか狂氣じみた、夢みる瞳になつて、牛小屋の中に立ちつくした。

(どうしたら、よからうか?)

マンは、迷う。

村でも、專賣局の煙草女工になりたい希望者は多い。ひよつとしたら、村娘にとつての、唯一最大のおこがれかも知れない。しかし、資格に面倒な條件がたくさんあつて、なかなか採用にならない。その金的を、マンは射

とめたわけである。普通なら、飛びあがつてよろこぶところだ。

ところが、マンの顔は當惑したように、眉がよせられている。

——都會。

——港。

——自由の世界。

——ブラジル。

せせこましい谷底の故郷から、ひろびろとした天地へ出たい。青春の血を騒がせる漂泊と放浪の思いは、すでに、早くから、絶ちがたい情熱となつて、マンの胸に燃えている。どこに行つても、鼻先のつかえる狭い山奥、田や畠をつくつても、五段歩とつづけられる土地がない。母の兄、マンには伯父に當る人が、ブラジル移民で成功し、大農園を經營している。そこには、眼のとどこかぬところまで續いた農場があり、四季を通じて、自由な耕作ができるという。マンの空想は、はるかに海を越えて、ブラジルの天地にまで飛ぶ。

——まず、門司港にいる兄林助を頼つて行き、そこで足場をこしらえて、ブラジルへ。

これが、マンの憧憬の構圖であつた。

大川時次郎の顔が浮かぶ。郵便局に勤めているこの青年を、マンも好きだ。村一番の男と思う。時やんも、マ

ンを嫁にしたがつてゐる。しかし、時やんは一人息子であり、大川家を繼いで、生涯をこの部落で終らねばならぬ。時やん自身も、引つこみ思案のところがあつて、村を出る積極的な氣持はない。彼の最後の理想は、柿ノ坂の郵便局長になることにあるらしい。

(そんなのは、いやだ)

と、マンは、思う。

表で、足音がした。牛小屋の前に來てとまつた。

「マン坊けえ？」

父善助の聲だつた。

「はい」

と答えて、あわてて、兄林助の手紙の方を、ふところに隠した。

小屋の戸を開けた。マンより先に、犬が飛び出した。背に薪を負い、手に鎌を持った長身の父が立つてゐる。

「なんじやい、戸をしめこんでしもうて……」

「お父つあん、これ」

マンは、専賣局からの封筒をわたした。ランプの明かりでそれを讀む、善助の日やけた顔に、みるみる、狂喜にちかい表情が浮かびあがつて來た。

「やんれ、よかつたのう。萬歳、萬歳」

そういつて、兩手で、萬歳の恰好をし、ほんと、娘の肩をたたいた。

「おマン、お前も、うれしいじやろうのう？」

「はい」

そう答えなければ、しかたがなかつた。

圍爐裏端で、一家、にぎやかな夕食がはじまつた。善助、イワ、長兄倉助、その嫁ミキ、その子の三歳になる松男、弟牛三、それに、マンの七人。マンの採用のお祝いといつて、善助は芋焼酎いもやうずの贈をつけたが、ふと、思ひだしたように、

「専賣局といやあ、あの駐在所の鬼が、七瀬の水車小屋でなあ……」と、話した。

マンは、胸のなかで、心臓が一廻轉したような氣がした。かあつと、顔が燃えた。眼を皿にして、父の顔を見た。

善助は、上きげんで、焼酎の徳利から、獨酌をしなが

ら、

「……なんでも、とうとう、狐に化かされたらしいぞ。

あの鬼奴、いつも、威張りくさつとつた。——この谷の者はみんな間抜けの阿呆たれじや。この文明の世の中に、狐が人間を化かすなんて、そんな馬鹿げたことがあるか。おれの方が狐を化かしてみせる。……なんて、いうてな。それが、今度は、狐どんなからやられたんじや。罰よ」

「そりやあ、ええ氣味じやが、どがあな風に、化かされんさつたとな？」